



川崎市立多摩病院



聖マリアンナ医科大学

33号

秋

たま病院ニュースレター

TAMA Hospital News Letter 2021



熱傷について

形成外科 田邊 雅祥

人類がいつから火を用いるようになったのかは未だ議論が有る様ですが、人類が火を用いた証拠の最古のものは140万年前とも160万年前ともされています。熱傷（やけど）の歴史も、人類の火の使用と共に始まったと言って良いでしょう。火を用いる人類にとって、熱傷は今もなお身近な外傷であり続けているのですが、その割には、正しい知識がこれ程知られていない外傷も他には無いのでは、と治療者として残念に思う事が少なくありません。

さすがに現在では囲炉裏やかまどで火そのものを使う機会は殆ど無いでしょうから、熱傷の受傷原因の多くは熱性液体（湯や油）です。以前は、小児が過熱した風呂に転落し、全身に熱傷を受傷する（残念な経過となる事も）という事例が少なからず見られましたが、近年はあまり聞かなくなりました。保護者の方々の意識が変わったのであれば良いのですが、実態は、最近の風呂は、給湯式であったり、設定温度まで沸いたら自動的に停止するなど、過熱しないものが普及したのがその理由として考えられます。卓上の食器の転覆や、炊飯器等から発する蒸気による受傷は、相変わらず頻繁に見られます。

受傷後の対応も「お湯が掛かったので急いで衣類を脱がした」、「取り敢えず自宅にあった軟膏を塗布した」、「冷やそうと思って受傷部に氷を当てた」、「アロエが良いと聞いていたので庭から取ってきて汁を使った」など、熱傷のきずにとって望ましくない行動を選択される方が少なくありません。熱傷受傷した際には、まず衣類の上から20分間程度水道水を掛け、衣類を外す場合は鉏などで切って一部ずつ剥がして取り、濡れた清潔なタオルで覆った状態で、きずには何も塗らずに医療機関を受診して下さい。

部門紹介

形成外科



形成外科では、熱傷の治療に加えて、きずあとのひきつれ（瘢痕拘縮）に対する機能回復目的の手術や、見た目の改善を目的とした手術を行っています。方法は、症状によって切除縫縮、皮弁、植皮などを使い分けていますが、これらでの治療が困難な場合には自家培養表皮を用いた治療も検討します。漫画や小説の様に綺麗サッパリ元通りという訳にはなかなかありませんが、少しでも生活の質の向上に寄与出来ればと思っております。

手術支援ロボット「ダビンチ」導入に向けて

多摩病院では、近年、世界的に普及している手術支援ロボット「da Vinci Xi Surgical System」導入に向けて準備を行っています。

ダビンチは鉗子の動きをより細密にし、自由な方向から手術を行えます。術者の手振れによる影響も受けません。また、これまで難しいとされていた角度からの視野を確保できるようになります。

「消化器・一般外科」、「泌尿器科」、「産婦人科」での運用を予定しており、現在、医師が研修を行っています。

導入するにあたり、施設基準等を遵守し、安全性を確保したうえで今秋の稼働を目指します。

